20160.2.25 朝日新聞（夕刊）

鮮やかに発光する第３世代の有機ＥＬ（手前）の解説をする安達千波矢教授＝福岡市の九州大

「第３世代」有機ＥＬ　特許を譲渡

製品化へ　九大がベンチャー企業に

九州大学は25日、同大学が開発した有機ＥＬに関連する50余りの特許を福岡市のベンチャー企業「Ｋｙｕｌｕｘ（キューラックス）」に譲渡した、と発表した。基礎研究が中心の大学から企業に特許が集約されることで、実用化に向けた開発が本格化する。同社はスマートフォンなどのディスプレー向けに、2018年の製品化をめざす。

有機ＥＬは炭素と酸素でつくる有機化合物で、電圧をかけると光が出る発光材料。現在は、イリジウムなどの貴金属を使うことで発光効率を上げた「第２世代」が主力だが、特許は米国が、市場は韓国企業が独占している。

その状況の中、九州大の最先端有機光エレクトロニクス研究センター長を務める安達千波矢（ちはや）教授が12年、「第３世代」とされる有機ＥＬの開発に成功。貴金属を使わずに効率よく発光でき、開発費用は第２世代の10分の１に抑えられる。第２世代で実現できなかった青色の発光にも成功、薄くて折り曲げられる材料開発も可能になった。こうした特徴を生かしスマートフォンなどの超薄型ディスプレーや照明の製品化が期待されている。明るい屋外でも鮮やかな色で見やすくなる効果も見込まれる。

安達教授は「着想から10年かかったが、特許譲渡も終え、自分たちの技術を世界に進める段階に来た」と期待を込めた。開発に臨むＫｙｕｌｕｘの安達淳治・代表取締役は「九大の特許を一括して使えるのは大きい」と語った。

製品化に向けて福岡県と福岡市は１月、「グリーンアジア国際戦略総合特区」の対象に同社を指定。法人税の軽減や固定資産税の免除といった支援を行う。（小林舞子）